

南方（南洋諸島・他）

張鼓峯参戦、

トラック諸島で終戦

長野県 赤羽 政喜

私は大正七（一九一八）年、長野県に生まれまし
た。軍歴を書きますと、昭和十一（一九三六）年十一
月、朝鮮咸鏡北道会寧の第十九師団歩兵第七十五連隊
第二機関銃隊に入隊しました。昭和十三年七月には張
鼓峯事件に参戦しました。

昭和十四年五月、ノモンハン事件が発生したのに伴
い、対ソ国境警備に当たりました。そして今度は南方
への転戦で、昭和十八年十二月、カロン諸島トラッ

ク諸島月曜島に上陸して、対空、対艦、対上陸に対す
る防衛に従事しました。昭和二十年八月、終戦とな
り、十二月に内地へ帰還し復員しました。

軍歴にも書いたように、私は終戦を南方のトラック
諸島で迎えて、内地帰還に際してアメリカ兵にすべて
のものを取られてしまい、あまり資料は残っていません。
また戦争が終わって五〇余年、私が軍隊に入っ
ても六〇余年ということになり、私の戦争体験は
遙か昔日のことで、ウロ覚えのことや、仲間から借り
た資料等を整理して体験を書き記すことといたしま
す。

私は、昭和十一年に学校を卒業しました。姉一人の

二人姉弟で、昔は農家の総領は跡を継いで農業をやるもんだと思いましたが、その農業をやるうという矢先に、世相は非常に混沌としてきて、この状況だといつかは兵隊に行かなければいけないと、それならいっそ早く行って帰ってきて、家の仕事をやってもいいんじゃないかと軽い気持ちで現役志願、その年の十二月に兵隊に出ました。

その時はまだ教え年十九歳で、満年齢で十八歳と数ヶ月でした。この若さでお国のために兵隊に行くということを、今の十八歳くらいの子供達は、どういう風に思うかと考えますが、そのような若い年齢の時に朝鮮の一番北の会寧という町の第七十五連隊に入ったわけです。

ここは対岸は満州とソ連という三国の国境地帯で、一番最北端の場所です、思想的には対日感情があまり良くない所であり、昔、朝鮮時代の上の役人が悪いことをした場合はここへ流されたという所です。そこへ昭和十一年十二月に入隊しました。まだ十九歳で右も左も分からないような年齢の時に、よくもまああんな所

へ行つたなど、今もって感じています。入隊して初年兵教育は勿論、その他の軍事訓練を受けながら、そこで軍務に従事しました。そして昭和十三年七月末、張鼓峯でソ連との国境争いが発生し、それに参加しました。この事件の主な戦場は張鼓峯の右の五二高地という所で、その左下の將軍峰という所に陣地を構えていました。この張鼓峯から五二高地にかけての一带は、一番の激戦地で、その戦に参加したのです。

この事件は、ソ連との戦争では不拡大方針があり、こちらでは鉄砲と機関銃ぐらいの軽装備でした。しかしソ連は戦車や飛行機を使うという大変な事件でした。そこで七月三十日から八月十四日まで、夜襲あるいは空爆等を受けながらそこを準備し、満州の国境線を確認してきたのです。私たち同年兵や後から入って来た人たちには長野県出身者が多くいましたが、この張鼓峯事件の時には軽井沢出身者の一四人が戦死、七人が重傷ということで、郷里伊那市の方々も多数戦死したというような激戦でした。

私は機関銃隊で將軍峰の方におり、そこから支援射

撃をしていましたが、その間、仲間の二人が爆撃で戦死をしました。この事件は五〇一六〇年昔のことですが、まだご遺族の方もおいでですし、その状況は、到底お話しすることのできないような悲惨な状況でした。このため私も、新潟などご遺族の方の所へも行きまして、お墓参りをしました。

その後、昭和十四年にはソ連とモンゴルと満州との国境紛争であるノモンハン事件が起こりましたが、その時には私たちは朝鮮で警備にあたっていただけで参戦はしませんでした。この戦いは非常に不利な戦いで、日本軍はほとんど全滅というような状況で、端的に言って負け戦だと、その後、新聞にも出ていました。

日本でも昭和の初めころから習志野学校で毒ガス教育をやっており、昭和十四年に私もこの習志野学校で毒ガスの教育を受けました。催涙弾とかイペリットだとかを実際に馬などを使って実験をしていました。その学校に三カ月おり原隊に帰ったのですが、それが原

因かどうか分かりませんが、いわゆる胸膜炎というのにかかり、一年ぐらい入院をして療養しました。原隊では、その間いろいろ厳しい教育があったようですが、私は入院をしていた関係でその間の体験をしていません。

そうするうちに、昭和十六年十二月八日に大東亜戦争が勃発し、当初はハワイ空襲など華々しい戦果が報ぜられました。が、漸次、戦況が悪化してきて、私どもの第十九師団にも動員がかかり南方へ行くことになりました。

トラック諸島へは松本で編成した柏兵団が行きましたが、その兵団がトラック諸島を目前にして撃沈され、兵力の三分の二がやられてしまったということ、私たち北朝鮮におりました第十九師団に急遽動員令が下ったのです。そこで編成をして、二月の真冬でしたが、夏服を着て上には防寒衣を着て釜山まで行き、そこで乗船、瀬戸内海を通過して和歌山沖を通り、横須賀で船団を組んで南方へ向かいました。

そのころは昭和十九年で、敗戦の色が濃くなり、私

たちもこれが最後だと心に刻みながら南下をしました。横須賀を出てすぐ、大島の辺りで早くも油槽船が一隻敵の魚雷でやられました。それでも駆逐艦二、三隻に航空隊が支援をするという形で一週間以上かけてトラック諸島へ到着、上陸しました。

その輸送船の中では、この辺に多く出るサメの対策として、サメは自分の体長より大きなものには寄つてこないということを本当に信じて、上陸するまで赤い越中褌を腰に巻いていました。

そのようにしてトラック諸島に上陸しました。本隊は春島というところにおりました。そしてわれわれは方々に分かれて、私は月曜島という所に終戦までいました。

昔の小学校の教科書にはトラック諸島というのは載っていましたが、現在は当然載っていません。当時は日本の信託統治領で、島民の皆さんとは仲良く食糧を作ったり、病気になるば薬をあげたりしました。

夏島には連合艦隊の司令部があり、私たちの行った時には戦艦などが相当おりましたが、いつの間にかど

こかへ行ってしまいました。

周りは全部珊瑚礁になっており、中に入ることができません。従つて入り口だけを塞げば上陸することができませんから、アメリカの兵隊は爆撃や艦砲攻撃をしただけで陸上戦にはならなかったのです。しかしこの爆撃、砲撃は熾烈で、最も大変な時期をここで過ごしました。

また、春島には飛行場があり、米軍はここを叩けば大丈夫だということで、主力をこの春島の飛行場攻撃に向けました。そこでこの飛行場を使えないよう壊滅状態に追い込んで、それから、その北のグアム、テナアン、サイパン、硫黄島などと島伝いに北上し、最終的に日本本土の上陸を目標にして、彼らはここまで攻めてきたのです。

その時には、私たちは敗戦を覚悟しており、情報によると終戦になった場合はオーストラリアへ連れていかれるということでしたので、少し持っていた米も靴下に入れて終戦を迎えました。

そんなことで八月十五日に終戦になり、以後約三カ

月ぐらいそこにおりました。その間、アメリカ軍の武装解除もあり、十二月に米軍の上陸用舟艇で我が家へ帰ってきました。

あの時、島民の皆さん方は、私たちを港まで送ってくれて「バイバイ」と手を振って別れました。

以上のように、私は太平洋戦争ではトラック諸島の一つの島で過ごしました。二度と戦争というものをしてはならないということ、子や孫にも良く言い聞かせ、戦争を体験した者が主体となってやるところの平和運動というものに、より多く寄与せねばならないと思っています。

終戦後、かつて一時を過ごした朝鮮やトラック諸島はどうなっているだろうかという思いで、まず昭和五十四年に朝鮮に視察の機会があり、ちょうど朴大統領が暗殺された時でしたが、新潟から出て韓国へ向かいました。

向こうに北朝鮮が見える三十八度線に机が一つあり、それが境界ですが、同じ民族同士で、いまだにあ

のようなせめぎ合いをやっていることは残念なことです。

また、小さい河を隔てて向こうへ入ったために、兄弟あるいは親子が離ればなれになってしまったという「帰らざる橋」という橋がありました。一日も早く南北朝鮮が統一されることを強く願いました。

トラック諸島の方は、平成十一年七月に子供達から「じいちゃんの終戦の時のトラック諸島に行ってみてはどうか」というような話を持ち上がった。これは子供や孫たちにも戦争の痛ましさを実際に目で見る方がいいのではないかとということで、総勢十一人で行って来ました。

トラック群島は月火水木金土日の「曜日」および「四季」の名が付いた島々で、この中の春島が現在では一番開けている島です。衣類や自動車なども、こちららのものとは比べものになりませんが、それ相当の近代的な生活をしています。

そこから一人の案内人を頼んで、私が終戦を迎えた月曜島へ行ってみたいと話したところ「いいでしょ

う」ということで、モーターボートに乗って月曜島へ行ったのです。当然電気もラジオも無線もない、電話もないという本当の離れ小島で、上陸してから、ここを管理している役人に話をする、快く視察を受け入れてくれました。

当時、私がトラック諸島にいた時には、坂本部隊の中でいろいろな役割をする立場でしたので、このアーゼンという村長とも仲が良く、話をしながら食糧や薬を配ったりしたこともあったので、案内してくれた日本人が「この方は終戦の時にトラックにいた赤羽さんという方です」と話しましたところ、ちょうど沖繩二世の方がおりまして、その方が「私は坂本と赤羽なら名前を聞いております」と言います。五〇余年経っても名前を覚えてくれたということは、当時仲良くやっていた結果だなあと強く感じました。そして子供や孫たちも「ここでじいちゃんは今地の人と仲良くやっていたのだなあ」と感じ取ってくれたと思います。

その沖繩出身の二世の方も四人の子供があり、一家

で三〇人あまりが同じ場所に住んでおり、私とも日本語で話をするなど、非常に感激して帰っていきました。これらのことから考え、やはり戦争ではなくて、手を握って平和な国になればいいけないということをつくづく感じました。

以上のような体験も、すぐ私のそばで亡くなった戦友たちのことを考えると、遺族の方に実際のこと、あのようなことは話せません。それは極めて悲惨なことで、実際のことをお話しすれば、ご遺族の方がどのよう to 思われるかを考えると、このように書き記すこともあまりしたくない思いがします。